

○甲斐殿道行

寐られぬまゝに思ひ立ち、出づるぞ名残り三日月の回り逢はぬも定  
 めなしと、思へども又「何の時にか君が面影を見る由もありなんと」  
 未だ東雲に立ち出づる、頃しも春の朝ぼらけ、垣根に言問ふ鶯の、  
 鳴く音に花やちりぬらん。とても花は春あらば、又も昔になりぬべ  
 し。二八の秋の紅葉こそ、惜しむに甲斐はなかりしと、思ひなぞら  
 へ行く程に、浮世にまはる車町、縁の末もいと長き、柳の町をも行  
 き過ぎて、甲斐なき戀は諏訪の山、前は稻荷の後迫、愛宕山をも妻  
 手に見て、我が身の上は生殺し、たとへ行くこそ物憂けれ、命あら  
 ば又來ん春と行ほどに、立ち寄る影もなほ更に、今はなき世に業平  
 の、名ばかり残る涼松、よしや芳野の花盛り、君ゆる見ること果敢

なけれ。實にや宮捨人の、花には何と隠れ家の、五月はまだき菖蒲  
 谷、東を遙に眺むれば、名にも似ん、鐘の聲なき山寺は、戀する人  
 の住家にて、遠路の里に立煙り、これぞ春の霞かな。木がくれに行  
 く道なれば、人目の關や忍びつゝ、心細くも通り山、暫しとて人や  
 立寄る柴の下、これより先きは下り坂、逢坂など、名を云はゞ、誰  
 が踏み初めし首途ぞと、思ひなぞらへ行く程に、名は白金の小石原、  
 眞砂の敷は盡くるとも、思ひは果てじ何時までも、限りも知らぬ命  
 ぞと、彼の明神を伏し拜み、南無や明神願くは、空吹く風のおとづ  
 れに、聞き及びにし與市様に、露の命の消え果てぬ、間に回り逢は  
 せたまへかしと、深く祈誓を申しつゝ、見下し見れば春霞、棚引く  
 雲の絶間より、遠山の櫻ほのかに見えし其の歌に、深山木の其の梢  
 とは知らざりき、櫻は花に顯れにけりと詠みたりし、歌の心にも相

逢へる、春の空と打ち眺め、脇本の宿を過ぎ行けば、絶えず流る、  
 思ひ川、鶉鳴くなる餅田原、行くに果てなき十日町、左には南無藥  
 師、流れの水も潔よし。折ふし満潮なりければ、竿さし渡す海士小  
 舟、身を諸共に浮れ出で、思ふ心の底深く、實にや忍ぶにも同じ心  
 の人もなければ、行方も知らぬ有様を、誰にか斯くと岩の原、何か  
 は君を松原の、苔の細徑踏み分けて、「思ふ加治木に着きにけり。」は  
 や珍宗寺の鐘の聲、君が在家を告げぬらん、人の別れや急ぐらん。  
 君が在家は常磐にて、今三洲の萩原と尋ね行きたる門の邊にイみて、  
 與市様々々と問ひけれど、左しも思ひし甲斐もなし。折ふし他行  
 なりしかば、力なくして立ち歸らんとは思へども、これまで來りし  
 印として、門の扉に書くばかり、其の文に曰く、聞きしに勝る黒金の、  
 遠きを忍びて、此處まで往來すといへども、不縁第一にして逢ふこ

とを得ず、空しく歸る道すがら、君に於いては恨なし。我が身の若  
 きより空しく、夕を送り、又何れの時をか期せんと、書き置きて歸  
 る道すがら、又と云ひても身のあらばこそと打ち歎き、與市様に投節  
 をはねかけて、誦ひ歸りし有様は、見る目もいとどあぢきなや、唯  
 何事も心に、物思はせて、「身を苦しむる我が身かな。」

○王政復古

王政復古の當時を、思へば過ぎし慶應の、三年の冬の十二月、九日  
 の日を始めにて、都の空に立ち歸る、「春の光もかきくらす。」雪解の  
 雲のたちまちに、世は刈菰と亂れつゝ、山郭公啼く頃の、五月やみ  
 にはあらねども、あやめも分かぬ墨染の、鞍馬の山の山びこに、響  
 きとよめる大砲の、音はさながら百雷の、一時に落つる心地して、

驚き騒ぎ泣き叫び、老若男女逃げまよふ、都の中はさながらに、鼎の沸くに異ならず。山ゆかば草蒸す屍、みづく屍といひ立て、身をかけためたるつはもの、鎧の袖にかやくや、星の位も三臺の、影薄れゆくさしぐしの、曉やみに打出す、火矢の煙に吳竹の、伏見も見えず白鳥の、鳥羽も別れぬ折しもあれ、空に輝く月と日の、錦の御旗九重の、大内山の山風に、翻りつ、公卿御門、押し開かせて出でたまふ。大將軍の仁和寺の、宮の威風にあたりては、靡かぬ草もあらじとて、ふり返りみる大丈夫が、勇氣も常に百倍し、軍よばひも鳴神の、轟き渡る修羅の道、斬りつ、斬られつ、阿鼻叫喚、官に従ふ參謀の、其の面々は東久世、烏丸を始めとし、矢守、高崎、中沼等、四條五條は旗奉行、前後左右を打ち守り、勤王諸藩の銳兵が、火花を散らす一戦は、國の安危と堅唾のむ、帷幕の中に置く霜も、血潮

に染むる紅葉の、丹き心をとりに、倒れ重さなる屍は、敵か味方か誰彼時、踏みしださ行く戦場の、習ひ常なき露の身と、かざす劍の束の間も、君を忘れぬ武士の『道の果こそ憐れなれ。』天地も響く震動に、炎逆捲く淀の城、見るく灰となりはて、空を蔽ひし黒煙、跡方もなく消え失せて、朝日の光あらはれぬ。七百年の昔より、武門に落ちし政權を、治めたまひて檀原の、聖の御代の古に、復したまひし大御代の、のどけき春に悦びの、眉も開けて打ちつどひ、昔語りと過ぎし世を、語りつ、酌む盃に、老いたる影もかつ見ゆる。此の宴こそめでたけれ。『此の宴こそめでたけれ。』

○島原合戦

○初段

國を申せば肥後の國、在所記せば割府といへる、あても在所に赤星源次綱明として、『弓取一人おはします。』其の頃年の年號申せば、天正九年辛巳の年、卯月七日と申すに、肥前の國守龍造寺山城守隆信方より使者の參る。いかに申さん赤星殿、主君のため誠に肥前に味方召さるゝならば、人質を賜はれとの御誼なり、赤星言葉に、國主の御意とは申せども、誰をか質に參らせん。其のとき使者の言はるゝには、承れば年は十四に成らせたまへる、若松殿と云ふが在るよし。肥前屋形に隠れなし。彼の若を質に賜はれ赤星殿とありければ、赤星答ふるに、若を一人持ちは候へども、彼の若を質に渡しては、跡の歎きは如何せん。さりとは又國主の御意には叶ふまじとて、若を召し寄せ尋ぬれば、若の言葉に、某國にあるならば、二人の親の御奉公、又國の替りとなるならば、質に渡らんこと、御心安く思召

せ、順て御供の士十八人を召し連れ、肥前を指して御渡りなされ、佐賀の屋形に伺候することを哀れなれ。未だ三日も過ぎざるに、二び參る其の使者の、言ふ事聞けば、赤星殿、承れば年は八つに成らせたまふ安千代殿とて姫のおはします由、肥前屋形に隠れなし。また幼少なれども、彼の姫を質に賜はるものならば、若の所は、國へと返すべしとの御誼なり。赤星聞いて言はるゝに、さては中々若を一人出してさへ、跡の歎きは如何せん。況してや幼少の姫を質に出しては、跡の歎きは尙ほ増さる。されども國主の御意には叶ふまじと、姫を呼び寄せ御尋あれば、姫の答ふるには、二人の親の御奉公、又は兄様の御身代りとなるならば、京鎌倉までも上るべし。況してや肥後と肥前は、近き間と承る。質に渡らんこと御心安く思召せとて、やがて女房六人、士二人を召し連れて、肥前へと御渡りなされ、佐

賀の御内に、兄妹ともに何候あるこそ、「何より物の哀れなれ。」是れはさて置き、に又、肥前に於いてつれなき士、隈部左馬介親興と申せしは、三年前赤星殿と、境の論を召されしが、痛はしや隈部殿、此の争に負けしかば、赤星殿より三百餘より三百餘町を踏み取られ、無念至極はなかりける。如何にもして赤星に、腹切らせんと思ふ折ふしなれば、是ぞ良き折なりと心得、隆信殿に作り文を上げたまふ。隆信殿は彼の文を披見なされ、赤星は肥前に兄弟の子供を質に渡し、其の上ながら薩摩に味方、肥前に二張の弓を引くと、斯る文なりければ隆信大に腹を立て、其の儀ならば肥前に於いても、法度の仕置に任せ、生磔と御意下る。痛はしや兄弟は、肥前屋形に三日と置かずして、肥前と肥後の境なる、南の關竹の夜原に送られけるこそ哀なれ。若の言葉に、兄弟ともに御殺しあるならば、肥

前屋形にて、只一太刀に御殺しあるべし。御殺しありとても、士なれば塀垣を、越えて忍び隠れは致すまじ。士は疊の上に生れ来て、野原に死するが本道と承る。夢にも知らぬ野原にて、顔は月日に晒されて、長く浮名の立つと思へば、是は一つのいかなり。只今敵と引組んで討死いたすものならば、簡程に物は思ふまじ、いかに申さん隆信殿、某は男の身にて、御殺あるとても苦しからず、幼少の妹は、國に御返し給はれと、日々に三度の詫をなす。姫の言葉に自からは、女の身にて苦しからず、兄の所は赤星が、家の世繼のことなれば、國に御返したまはれよ隆信殿と、日々七度の詫をなす。隆信御諛に、如何に兄弟、科なき隆信を怨みたまふな、謀叛心の父の赤星を怨みたまへと、御意下る。姫の言葉に、科なき隆信殿も怨み申さぬ、況して父の赤星も怨み申さぬ、中より作り文を上げたる隈

部殿こそ、今生後生の怨みなれ。若の言葉に、如何に安千代、何某の子孫と云はれて、女にこそは生れ来て、人を怨みては如何せん。死出の山三途の大川、左京が橋までも、「一つの道ぞと喜びたまふこそ哀れなれ。」若の其の日の装束は、先づ肌よりは白地練絹、上に紫染にひわだ色の、くゝり小袴しつかと垂れ。十八人の侍を御側に召され、如何に方々鳴を静めて聞きたまへ、某兄弟は隆信殿より身に覺なき科に、上意の宣ふ所なり。とても上意は遁るまじ。御身達は暇取らすぞ。何處になりとも落ち行きて、我れに増したる強き主人を頼みたまへと仰せける。十八人の侍は頭を地に附け、皆一同に言葉を揃へ、嗚呼情なき若君様の御誕やな、侍が強き時は主人と頼み、今弱しとて君を振捨つる法やあらん。とにも角にも若君諸共にと申し上ぐれば、若君の悦び斜ならず。十八人の侍に御盃を賜はり

ける。爰に又姫の其の日の装束は、先づ肌より十二小袖を召されける。上着は其の頃肥後にはやりし白糸小袖召し重ね、たけと一世の黒髪は、月の輪形にゆひ結び、まげの糸にて三ふし止め、やがて六人の女房達を御側に召され、如何に方々鳴を静めて聞きたまへ、自から其兄弟は、身に覺なき科に上意の宣ふなり。とても上意は遁るまじ。御身達は千に一つも隆信殿より御暇賜はるものならば、國の如くに落ち行きて、二人の親の御前に参り、自分達兄弟斯くのごとくなりし有様を、殘すことなく申し上げよと仰せける。六人の女房達は、唯涙に咽びて、誰とて返事申す人なし。痛はしや彼の兄弟は、やがて檢使を御側に召され、いかに檢使の方々、はたの板は古より定まる法西に向へるが、本道と承れど、某兄弟は肥後の方へ向けてたまはれ。左もあらば割府の在所に二人の親の在すかと思へば、

吹き來る風までなつかしや。いかに檢使の方々と宣へば、檢使の方は聞召し、當城は往古より傳はる儀式のはたの板は、東に向くるは天下に恐れあり、御身達兄弟とても、西へ西へとありければ、痛はしや兄弟は、もはや力に及ばず、左右の手を差し上げ、肥後の方を打ち眺め、嗚呼なつかしや割府の御所と、七たび招きては、はたの板に召されけるこそ物の哀れをとめたれ。彼の兄弟は士の義理なれば、三日が間は、小歌拍子にて過ごさせたまふ。痛はしや姫君は、まだ幼少のことなれば、四日に當る酉の刻、竹の夜原の朝の露と消えたまふ。若の言葉に如何に安千代、また此の世に在るか無きかと聞きたまへば、答ふるものは竹の夜原の原くらき、磯打つ浪に空飛ぶ鳥の羽音ばかりにて、いと哀れは増さりける。若君も次第に〜に衰へて、七日に當る午の刻、竹の夜原の朝の露と消えにける。』中

中物の哀れなり。』十八人の侍は、皆一同に肥前屋形に亂れ入らんと思へども、多勢に無勢のことなれば、力に及ばず、皆はたの板下に立寄りて、思ひ〜に皆清く、自害をなして果てにける。やがて此の由隆信聞召し、姫に付き従へる六人の女房達を御前に召され、如何に其の方達は、是れより暇取らする、何處の世にも落ち行きて、思ひ〜に身を雪げよと御意下る。勝の前進み出で、申す様、嗚呼情なき隆信様の御誼かな。某二十歳のときより御乳を上げし姫君さへも御助けなきに、數ならぬ我々どもに、御暇賜はるとも、國に歸りて如何せん。さらばとばかりに自害をぞ遂げにける。未だ惜しかる年は、勝の前が二十七、萬勝の前が二十五、千勝の前が二十一、小宰相が二十、小櫻が十九、小相が十六、いづれ劣らん花盛り、夜半の嵐に誘はれて、』散りて行くこそ哀れなれ。』やがて此の由割府の

御所に洩れ聞え、さては中々是れは又、夢か現か幻か、夢なら覺め  
 てもゆけ、現ならば聞えてもゆけ、幻ならば暫しが程は、松の葉色  
 にも留まれかすと、天に仰ぎ地に俯して、歎かせたまふぞ哀れなり。  
 割府の御所は寺々の、鐘の響もとゞまりて、長夜の響きと鳴きくら  
 す。是れはさて置き爰に又、肥前に於いてつれなき士、隈部、添島、  
 鍋島、田尻の人々は、此の序に赤星が、領分を知行にせんと、我が  
 手三千餘騎を引具して、割府の御所を指して急がれけり。やがて割  
 府にも成りぬれば、彼の御所を二重三重に取り圍み、鯨波の聲をぞ  
 揚げにける。赤星は此の有様を見て、さては中々兄弟の、子供を無  
 殘に殺され、歎かせたまふ折ふし、敵に攻められて、太刀も揚らぬ  
 次第なり。もはや力も及ばずとて、彼の御所に火を掛け、天も霞と  
 焼立つる。住み馴れし割府の御所を袖白雪と振り捨て、八代指し

て落ちんとするに、後より敵は鯨波の聲、しげく慕ふて追ふて来る。  
 是れは偕て置き爰に又、赤星郎黨に上村兵部左衛門とて、大剛の勇  
 士あり。此の有様を見るよりはやく、主を討たせては叶はじと、我  
 が手三百餘騎を引具して、門外指して切つて出づれば、肥前方はこ  
 れを向へて攻めかゝる。如何に方々某を如何なるものと思召すらん、  
 赤星が郎黨上村兵部左衛門とは我がことなり。手並の程を見給へや  
 とて、言ふより早く三尺八寸の、大太刀を抜き持つて、大勢の中へ  
 面も振らず割つて入る。追ひつ追はれつ、受けつ流しつ、三度の太  
 刀打、四度の追入、五度の戦六度の合戦、七八度目には鎬を削り、  
 鏑を削り、切羽の金もみぢんになれと、世にも烈しく此處を専途と  
 戦ひしが、痛はしや向ふ敵八百餘騎は、只やみくと討たれける。  
 我が手の三百有餘騎も、つまりぐに討死す。今一太刀とは思へど



も、多勢に無勢のことなれば力叶はず、小高き山に馳せのぼり、腹十文字に掻き切りて、清く自害をなしたりける。未だ惜しかる年は二十八、「惜まん人こそなかりけれ。」赤星殿は此の隙に、八代指して落ち給ふ。八代の慈眼寺、正法寺、彼の兩寺を深く頼ませたまひて、三年の程は、終夜百萬遍を唱へて、「月日を送りておはします。」

## 〇二段

去るほどに三年を過ぎぬれば、赤星殿は徳の口より夜船に召され、「薩摩を頼みに下らせたまふ。」順風なれば帆を揚げて、程なく出水米の津に着かせたまふ。其の頃の米の津は、島津義虎公の御持なれば、直ちに義虎公の御前に参り、如何に申さぬ某は、肥後に於いて割府の城主、赤星源次綱明と申すものなり。肥前に於いてつれなき士、隈部左馬之介親興といへるもの、讒言に依りて、隆信殿より兄

弟の子供を無慘に殺され、其の上敵に攻められて、未だ太刀も揚らぬ次第なり。やうく是れまで参り候ふなり。何卒肥前に一度弓を引いて給はれ、義虎殿とありければ、義虎公始終の様子を聞召され、さては中々世にも無残なる次第を聞くものかな。其の儀ならば、これより北に當りて、大口と云へる在所に、新納武藏守忠元とて、弓取一人おはします。彼れを頼ませたまへとて、案内者二人を連れたまひ、はや米の津を出でにけり。赤星夫婦打ち連れて、髪は月日に曝されて、裾は露袖は涙に打ちしめり、つくつくと呉竹の世は、逆様に杖をつき、嗚呼兄弟の子供が事のいや増さる、音に聞えし高花越を打ち越えて、急がせたまへば程もなく、菱刈表大口に成りぬれば、直ちに新納武藏守殿に對面ありて、斯様々々と其の次第を申し述べ給ひければ、武藏守殿聞召され、偕ては中々無残なることを聞

くものかな。其の儀なれば是れより東に當りて、佐土原と云へる所に、島津中務太輔家久公として、軍奉行のおはしませり。此の人を深く御頼みあるならば、數ならぬ武藏も、島津の御馬の先に立たんと言はれしかば、又二人の案内者を召連れ、はや大口を立ち出で、音に聞えし般若寺越を、軽く易々立ち越えて、真崎五ヶ所を打ち通り、白飛山を伏し拜み、野尻紙屋を過ぎ行きて、急がせたまへば程もなく、日州佐土原にぞ着きたまふ。直ちに中務殿の御前に參る、赤星は事の次第を殘らず申したまひ、何卒肥前に弓を引いて給はれと請ひにけり。家久公此の由を聞召され、是れは以ての外の仰せかな。當國は赤星殿とは、矢崎合戦の折の大敵、肥前は味方なり、其の儀無用と仰せける。赤星は是非に及ばず、涙と、もに中務殿の御前を立たせたまふ。爰に又中務殿の嫡子に、又七殿とて今年十三に成らせた

ふが、赤星を哀れと思召し、直ちに父君の前に出で、いかに申さん父上様、國主が國主に頼むは世にある習ひ、假令大敵なりとて、人窮すれば本に歸る。鳥窮すれば懐に入るとかや。夫武士の習ひにて、昨日の敵も今日の味方。今日の味方も明日は敵、何卒御加勢あつて給はれかし。左もあらば某も御供仕り、御馬の先きにて高名いたさんと、勇み進んで言ひければ、中務殿聞召され、又七殿の忠氣に感じ、其の儀ならば赤星を呼べとの仰せなり。やがて呼ばれし赤星は、これを聞くより悦びて、直ちに中務殿の御前に參られける。やがて中務殿御前に、いかに申さん赤星殿、當國は島津義久の領地なれば、某とても議定返事は致されず、兎にも角にも義久公に御意を窺ひ、弓を引かでは叶ふまじとありければ、悦びたまふこと限りなし。それより佐土原小路々々に、島原攻と觸を回せば、我もくくと

進む侍、七百餘騎とぞ聞えける。嫡子又七殿三百餘騎、御父子ともに一千餘騎にて、はや佐土原を御立ちなされ、急がし給へば世は何事も、勝目の坂を打ち過ぎて、はや高岡を馳せ通り、老川に成りぬれば、死出三途の川を打ち渡り、今日も日はまだ高城と打通り、最早庄内都の城に着かせたまひ、竹の下なる一夜の笹陣召されける。直に其の夜は北郷一雲殿に御内談召されしが、心得たりと觸狀を回されたまへば、先づ一番に小杉、上持、北郷民部左衛門を始めとし、都合其の勢一千餘騎にて、はや都の城を、まだ夜深くも立ちなされ、元服の渡りを三重町過ぐれば、眞幸の峰を越え、人の中なる本路原、六道坂をも打過ぎて、心安くも通り山、牧の原をも下らせたまへば、はや福山の宮が浦にぞ着かせたまふ。直ちに宮が浦々に、兵船二十餘艘を催し、宮が浦より御舟に召され、先づ一番に弓手に見えしは櫻島、

妻手に見えしは源氏の内神、正八幡を伏し拜み、捨て、置かれん濱の市、七里小濱や長濱の、加治木の里を詠むれば、實にや名高き蛇王嶽、龍は住まねど黒川や、爰は脇元別府川や、龍が水をも跡に見て、三船の明神拜みつゝ、暫しは此處に浮び船、浦吹風に帆を揚げて、順風よければ早鹿兒島の、春日の町に着かせたまふ。中務殿は直に屋形に参り、赤星が次第を申上げければ、義久公聞召され、さては中々赤星は、弓矢を取りては大敵なれども、國主が國に落ちて主を頼むは、世にある習ひ、兎にも角にも弓をひかでは叶ふまじ。されど又軍は、勢の多少によらず、大將の運によるべし。此の度の大將は、島津中務父子と御意下る。中務殿は直ちに御前を罷り出で、鹿兒島小路々々に、肥前島原攻めと觸を回させたまへば、我も我もと進む士、一番に島津中務殿父子、同苗輝久、北郷、樺山、鎌田寛政、新納忠通、伊集

院久治、吉利、吉田、加治木彈正、穎姓、佐多、島津圖書頭忠長、  
 喜入、肝附、入來院、桂、梅北、敷根、比志島、弟子丸、宮里、野  
 村の何某、町田出羽守、中にも川田駿河守、川上左京久堅、稻留左  
 京、猿渡右京、出水方には島津義虎公、同名伯耆守、水谷、植村、  
 大橋、平田和州、村田狩野介、彼方々々を先きとして、都合其の勢  
 一萬三千餘騎、唯やみくくと馳せ集まり、吉日を選ばれ、鹿兒島を  
 立ち出でにけり。旗指物を朝日に輝かし、「其の様勇々しくぞ見へに  
 ける。」鶴丸山を跡になし、音に聞えし水上坂を打ち越え、腰は掛け  
 ねど横井原、間遙かの五本松、君の心は實に清藤涼み松、伊集院天  
 郎坂をも打ち過ぎて、城はなけれど城の町、急がせたまへば程もな  
 く、市來の港に着きたまふ。一夜の宿陣召されける。大隅薩摩は遠  
 國なれば、肥後に合する旗が二十四本と聞えける。明くれば市來の

港を立ちなされ、世に何事も勝目の橋を打渡り、華の五反田打過ぎ  
 て、薩摩山をば二たびと、歸らぬ死出の山と打通り、佛の前にはあ  
 らねども、夕日に向ふ暮橋や、五月半の青の浦、高城の小路を打ち  
 過ぎて、西方阿久根を駆け通り、急がせたまへば程もなく、出水青  
 屋に着かせたまふ。義虎公の旗揃へ、末の津へ三日か間は、軍の評  
 議を召されける。斯くて三日も過ぎ行けば、家久公の御馬は、徳の  
 口へを回さる。兵船三百餘艘を一つに押寄せ、矢筈嶽より見下す、  
 嵐ともに船を漕ぎ出し、名所舊跡、浦々眺めて面白や。先づ一番に、  
 夕生れて、今朝見えすして、はや見え出でしものはらび縞、君の  
 御運は長き齡、永島は敵のためには獅子の島、川瀬、笠山、三日月  
 山を跡に見て、駒は立たねど牧の島、寝亂れ髪のかつら崎、笛と太  
 鼓はなけれども、神樂崎をも漕ぎ通り、君はなけれど御所の浦、時

に渡せば今浦本浦唐木崎、境二又うろう崎、柳の瀬戸も跡に見て、今日の日もはや暮羽鳥、一夜の宿をからふ島、夜はほのくゝとあかふ崎、鴛鴦は住まねど池の浦、名残惜しくも姫の浦、三角に漕ぎ出で見れば、はや先手は島原の、安徳寺にぞ陣を取。是れは偕て置きこゝに又、鎌田寛政、新納元忠、吉利、吉田、彼の人々は薩摩に於いて、物に慣れたる武士なれば、天草島に打ち渡り、島人五六名を搦め取り、案内者として島原陣にぞ渡さるゝ、中務殿は此の由聞召され、大に悦び、最早軍の手當召されける。先づ一番に鎌田寛政、新納忠元、伊集院久治、吉利、吉田、彼の人々は、一千五百餘騎にて、濱の出口の手當なり。加治木彈正三千餘騎にて、大手の口に控え給ふ。島津中務殿御父子、川上左京久堅、彼の人々は二千餘騎にて、桑原の陣に籠りたまふ。平田和州、村田狩野介は、残の勢を引

きつれて、島原口をしかと堅め、肥前方より寄せ来る敵を、「今や遅しと待ち給ふ。」

## 〇三 段

去るほどに、薩摩方は思ひくゝに陣所を構へ、龍造寺山城守隆信方へ使者を立て、案内乞ふて内に入り、此の由斯くと告げければ、薩摩軍衆が寄せてあるなら、大軍を催し、「唯やすく」と打ち滅さんと、「はや六ヶ國に觸れければ、我もくゝと進む侍、先づ一番に隈部左馬介、鍋島丹州、添島右衛門、寺山陸奥守、野口能登守、圓城寺美濃守、成松遠江守、一族には小川武藏守、小宮源左衛門、後藤家持、龍造寺家種、此の人々を初めとして、都合其の勢六萬七千餘騎、時を移さず寄せて来る。龍造寺山城守隆信を大將として、九十三本の旗を靡かせ島原にこそ渡らるゝ。やがて肥前軍衆は薩摩方を一目

見て、さては中々此の度の合戦は、案にも違はぬ小勢かな。いざ高  
珠數にはあらねども、手の内にて揉まんものをとて、勢荒鷹の小鳥  
を狙ふて勇むがごとくなり、薩摩に於いて島津中務殿之を、御覽な  
され、いかに方々あれを見よ、此の度の合戦物に喩へ見れば、籠の  
内の鳥、網代に籠る魚とかや、前には大敷後には大海、左右には巖  
石に圍まれて、洩れて行くやうは更になし。されど又中務殿は、智  
惠第一の名將なれば、二心つかはん其のために、三百餘艘の兵船は、  
皆島原の高濱に引き揚げ、悉く焼き捨てる。やがて陣屋々に觸を  
回し此の度の合戦、こたひ薩摩に歸るとは思ふなよ、皆島原の土と  
なるものと思ひ定め、向ふ先きは面も振らず、切つて通れと諸軍勢  
に下知をなし、明くれば水無月十八日と申す。また東雲ばかりに、  
肥前方總陣一度に、鯨波の聲をどつと揚げ、野口の陣に押し寄する。

大將隈部左馬之介親興と名乗り、二千餘騎にて大手の口に押し寄す  
る。薩摩方先手の大將、稻留左京、猿渡肥前守一千餘騎を引いて、  
肥前方大將の中になつしくらに切つて入り、追ひつ追はれつ受けつ  
流しつ、三度の太刀打、四度の追込、五度の戦、六度の合戦、七八  
度目には鎧を削り、鏑を割り、切羽の金も微塵に成れど、世にも烈  
しく此處を干途と戦ひしが、隈部左馬之介を始め、向ふ敵一千餘騎  
は打ち取りたり。されど又稻留左京、猿渡左京其の外三百餘騎は、  
つまり〜に討死す。未だ惜しかる稻留は二十六、猿渡三十一と聞  
えたる。爰に又川田駿河守は豫て傳へし兵道者なれば、清水谷に下  
り、夜の間七度の水をかへり、天に向ひて秘法を行ひたまへば、  
源氏の氏神正八幡、諏訪、稻荷、祇園、春日の五社の神より、此の  
度の合戦は、肥前は亡び、薩摩は勝軍に疑ひなしと御託宣ありしか

ば、中務殿此の由ぞ聞し召され、御悦び斜なまならず。最早此の由陣屋陣屋に觸れさせたまへば、これを勢に島津左衛門尉輝久は、一千餘騎を引いて、野首のくびの陣より一つ貝を相圖として、切つて出づれば肥前方、小川武藏守が大勢におろし合せ、此處を干途と戦ひしが、向ふ敵一千餘騎は討取り、『陣所を指して引いて行く。』其の勢ひに加治木彈正は、三千餘騎にて大手の口より切つて出づれば、肥前方寺山陸奥守が勢におろし合せ、大勢の中に割つて入り、群がる敵を弓手妻方に打ち捨て、當るを幸ひ其處引くなといふまゝに、此處を干途と戦ふ。ば、又も向へる敵二千五百餘騎を討取り、陣屋を指して引いて行く。爰に又平田和州、村田狩野介二千五百餘騎を引いて島原口より討つて出で、肥前方繩口の大勢におろし合せ、面も振らず、火花を散らして戦ひけるが、又も向へる敵一千餘騎を討取り、陣所

を指して急ぎ行く。是れは借て置き爰に又島津中務殿は、軍は今が時分と心得て、嫡子ちやくし又七殿を御側に召され、いかに又七、唐土の虎は一日に千里を馳せて駆け戻り、一身を捨て、毛を惜しむ。夫れ日本のの武士は、幼きときより、武藝を盡し、名を末代に残し置く。人は一代名は末代と申す、必ず跡に残りて未練いたすな。名字の耻辱、家の耻といふより早く、東の北山の手口に馳せ回り、肥前方大勢の中に横合よこあより打つてかゝり、やがて大音揚げて、いかに方々某を如何なるものと思ふらん。薩摩に於いて島津中務とは某なり。手並のほどを手本にせよやと、いふより早く二尺八寸の太刀を抜き持ちて、大勢の中に割つて入り、眞向立割車切、當るを幸ひ其處動くなといふ儘に、追ひつまくりつ受けつ流しつ、西より東蜘蛛手搔く打、十文字八つ葉形をいふまゝに、縦横無盡に切り立つれば、四方にさ

つと小路を開け、又もや向ふ敵三千五百餘騎を討取て、陣所を指して引き退きの。是はさて置き爰に又、川上左京久堅は、軍は今が華と心得て、我が方三百餘騎を取り構へ、栗原の陣に控えけるが、窃に寺山が死したる旗を奪ひ取り、肥前軍衆に様を替へ、敵陣の中を彼方此方と回り給ふが、鍋島に行き逢ひ、いかに鍋島殿某は士の未練ながら、只今中務殿の横入に目かくれて、我が君隆信公の御旗本を確と忘れ候ひしが、教へたまへと涙と、もに言ひければ、鍋島の運や盡きけん、此の人々を味方の者と心得て、床几に腰を掛け、母衣掛武者にておはします、急ぎ参られよと教へける。左京斜ならず悦び、鍋島が教の通り、本陣にせめ登り、もはや手の中と心得て、其の日の装束を改め、いかに申さん隆信殿、某を如何なるものと思ふらん。薩摩に於いて島津義久公の郎黨川上左京久堅とは某なり。

此の度赤星が兄弟の子供の恨みの太刀を請けて見給へと大音揚げて申しける。隆信公は大に驚き、さては中々川上は、薩摩に於いて家ある武士か、家なき武士か、若し家なき武士なれば、日下に回れとありければ、川上殿はからりと打ち笑ひ、さては中々思ひも寄らぬ仰かな。士が士を討つに日下日表の差別なしといふまゝに、三尺八寸の大太刀を抜き持つて、隆信の弓手の袈裟掛、水もたまたらず打ち落す。御側の士三十六騎は、はやくも此の由見るよりも、主を討たせては叶ふまじと切つて掛れば、川上殿は隆信を討ちたる勢に、世にも烈しく此處を干途と戦へば、痛はしや三十六騎も、一つ枕にたゞやみくと討たれたり。隆信の年を申せば五十一、やがて隆信の首を太刀の先きに貫きて、小松原の本陣を心静かに引いて行く。やがて小松原にも成りぬれば、鍋島丹州、添島卯右衛門彼の二大將



の者ども、此の由を一目見るより、さては中々あれを見よ、薩摩軍衆が、何時の間に奥の陣にもれたかな。主は討たる、手勢は持たず、我が君の敵、何處までも落ち行くぞ、遁すまじと言ふより早く、切つて掛れば、川上殿心得たりといふまゝに、向ふたる先きは只一筋に切つて通れと、士卒に下知をなし、寄せ来る敵は群りて、追ひつ流しつ受けつまくりつ、こゝを干途と戦へば、向ふ敵數多討取り、任すまじたりとて味方の陣に引いて行く。頼て隆信の印を實檢に備へければ、中務殿心得たりと、小高き所に馳せ上り、大音揚げて、肥前の大將龍造寺山城守隆信を、川上左宗久堅が討取りたりと呼ははりて、勝鬨を三たびどつと揚げたまへば、薩摩軍衆はこれを襲ひ、三ヶ國の勢は一手に成りて、肥前方の落ち行く勢に掛け合せ、弓鐵砲を放ちかけ、おめき叫んで戦へば、いたはしや肥前軍衆は、秋の

田の水にはあらねども、つまりくに切つて落さるゝものは、數しれず、斯る處に島津又七殿は、鍋島が落ち行く所を見たまひて、駒をはやめて、如何に申さん鍋島殿、何處まで落ち給ふぞ。斯く申す某は、薩摩に於いて島津家久が嫡子、島津又七とは某なり。今年歳は十三歳、軍が今日が始めなり。此の度の合戦に討死いたすものなり、我れを討取つて高名せよと呼びければ、鍋島も落ち行く駒の手綱を引返し、大將は討たれ手勢はなく、何の力で軍せんと、馬より飛び下り、甲を抜いで降参することを哀れなれ。又七殿思召す様、降参したる士を切て捨てんは如何ならんと、如何に鍋島殿、島津の家を如何なるものと思ふらん、忝くも清和天皇の御末なれば、島津方に二たび弓を引くこと無益なり。此の度の合戦は、赤星が敵軍のことなれば、國取るまでは及ぶまじ、肥前の城は御邊に預け置くと

ぞ仰せける。鍋島大に喜び、三たび禮して御前を下り、肥前を指してぞ急がる。『其の後中務殿は、討死ある首賦を召されける。肥前方には龍造寺山城寺隆信を始めとし、士大將百三十五人、其の外總勢一萬千七百餘騎とぞ聞えける。薩摩方には稻留猿渡を始めとし、上下ともに八百餘人とぞ聞えける。さても討死せし隆信の首を實驗に備へければ、やがて隆信の印を太刀の先きに貫き、小高き所に差し揚げて、島津屋形を軍神摩利支天尊と伏し拜み、誠に島津方は今生後生忘れ難しと喜びたまふこと限りなし。爰に又八代御前は、此の印を見て、兄弟の子供の事がいや増さるとて烏丸にて蹴上げ蹴下し、七たびが間氣色をなして、八度目に納め置く。川上殿は此の事見るより、大に腹立て、士が太刀の先にて取りたる印を、女の手足に掛けては、如何せんとありければ、又七殿進み出で申されけるは、

いかに申さん川上殿、古より女童と言傳へのあるが誠なりとのたまひて、様々川上殿の心を取直したまひけんとなん。『其の年の年號申せば、天正十二年甲申、頃は三月十四日なり。其の日の干支は、辛の卯、源氏の氏神正八幡の御縁日、世の中は何と聞きても唱へても、浮は世の中、つらきは隆信、さをひは薩摩方。物の哀れを留めしは、赤星が兄弟の子供にて、『諸事の哀れを留めけり。』

○常陸丸

池邊義象作

征露の軍やうくに、進みくして南山の、險阻も既に打ち破り音に聞えし要害の、旅順港も閉塞されて、鷲の棲むてふ滿洲も、君が御稜威の旗風に、今は靡かぬ草もなし。心筑紫の島はなれ、玄海灘の只中に、吹く朝風に日の丸の旗をひるがへす常陸丸、佐渡も續き

て進み行く。船路はなれて白浪寄る邊に如何に遠からず。何ぞ荒ぶ  
 るあら潮の逆まく中に黒煙は、只一筋に走り来て、我れを取りまく  
 敵の船、こは何事と問ふ間もなく、亂射亂撃雨おられ、進みのがれ  
 ん暇もなく、千里を走る猛獸も、水に入りては如何にせん。萬里を  
 翔る大鵬も、水には翼折れぬべし。心ばかりは早れども、運送船の  
 悲しさは、進退こゝに谷まつて、詮方無くも敵艦に、任せはてしぞ  
 是非もなし。佐渡は如何と眺むれば、霧にまかれてわからねど、同  
 じ様なる運の末、輸送指揮官須知中佐、是れまでなりとや思ひけん、  
 大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をば手に轉じ、都の方を伏し拜み、  
 火をば放ちて焼きたれば、各々將士もそれごとくに、貴重の品を焼き  
 すてぬ。此有様を打ち見つゝ、中佐は軍刀手に握り、無念の涙はら  
 はらと落つるを、袖に打ちはらひ、萬歳となへて悠々と、腹掻き切

つてぞうせにける。連れなる將校はじめとし、下士卒に至るまで、  
 同じ枕に伏せにけり。海に投じて死するあり、敵は益々加ふれば、  
 甲板はたちまちに、屍の山を築きつゝ、血潮を玄海の浪あざれて  
 染みにける。哀れなるかな常陸丸、君萬歳の聲細く、日は六月十五  
 日、夕日の浪にちらされて、あやめもわけぬばかりなり。實に誠忠  
 の兵が、十年の間朝夕に、磨き鍛へし日本刀、精氣こもれる切味  
 を、試さん敵を前に見て、遺恨の刃ひと太刀に、酬いんこともなく  
 なりて、駒のひづめに滿洲を踏みにじらぬも無念なれ。ウラルの山  
 を越えて、あらしもまぼろしか、思へば無念の極なり。嗚呼一  
 聯隊の我が勇士、水漬く屍は消えしかど、國に盡せしますらをの、  
 清きその名は世々にひびき灘に立つ浪の、絶ゆるときなく仰がれて、  
 『未まで遠く流らん。』

薩摩琵琶歌集

明治三十八年六月  
明治三十八年六月

日印刷  
日發行

(薩摩琵琶歌集附)

正價拾五錢

著作者 東京琵琶歌會

發行者 岩崎鐵次郎

印刷者 長谷川辰二郎

印刷所 小川印刷所

東京神田區錦町三丁目一番地



著作權所有

發兌元

東京神田區錦町二十一番地  
電話本局三〇六七番

大學館



川村花曉君著

百人一首必勝秘訣

價十五錢 郵稅四錢

前編「トランプ」の秘訣、「トランプ」の性質、取りダブルイナス、引合せ、トランプオン、銀、後編百人一首必勝秘訣、百人一首の性質秘訣、の第一暗誦法、第二練習法、第三排列法、第四の注意、第五見方、第六取方、第七手附の注意、第八誤り易き牌札、やく札、伏牌札、の種類、牌札製造法。

川村花曉君著

家庭遊戯博士

價十五錢 郵稅四錢

本書は家庭に於て行ふに最も適當なる遊戯の種類を網羅し其方法を平易に説明せるものなり、行軍將棋、名指、萬國古物博覽會、編引會、飛盤六、洞雙六、新案學生生活雙六、玉突、餅引、煎餅割、菓子のお取、かるた會等十數種の遊戯に就きて既述したれば新春の集會に喝采を博せんと欲するの士は須く本書を一讀せざる可からず。

川村花曉君著 (再版)

歌かるた取方と百人一首講義

價十五錢 郵稅四錢

はしがきには百人一首の由来について悉しく記述し前編と後編に分ち前編には百人一首を一音宛、叮嚀に講述し、後編には競争の極意として暗誦の方法傳習の方法、盤面排列圖、牌札の圖面、符合の暗誦を述べ、排列法、陣立、旋戦計書、取り方、迅速を要すること、親和力等に分ち更に各々數節に涉りて詳述せる未だ曾て類を見ぬ珍書なり。世の源氏方の學生平家方の令嬢諸君は是非一本を購うて戰場に相見ゆるの時の準備をせられよ。

東京薩摩琵琶會館

薩摩琵琶歌集

價十五錢 郵稅四錢

前編 琵琶歌集、琵琶、曲譜の解説  
後編 歌集、六十八種

押川春浪君著 岡落葉君畫

第一編 奇人の旅行

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 岡落葉君畫

第二編 世界武者修行

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 岡落葉君畫

第三編 空中大飛行艇

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 岡落葉君畫

第四編 怪人奇談

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 岡落葉君畫

第五編 魔島の奇跡

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 岡落葉君畫

第六編 續空中大飛行艇

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 美術石版畫入 (四版)

第一編 新アラビヤナイト

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著

第二編 へーグ奇怪塔

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著

第三編 立身膝栗毛

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著

千年後の世界

價廿五錢 郵稅四錢

押川春浪君著

航海奇譚

價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

無銭旅行

價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

乞食旅行

價廿五錢 郵稅四錢

鐵脚子著 <b>野宿旅行</b> (再版) 價七五錢 郵稅四錢	奇脚子著 <b>貧乏旅行</b> (再版) 價廿五錢 郵稅四錢	米國ミス、マロック、原著 <b>新空中旅行</b> (三版) 價廿五錢 郵稅四錢	早田玄洞君著 <b>膽力修行</b> (三版) 價廿五錢 郵稅四錢	長田偶得君著 <b>明治六十大臣</b> (六版) 價三十錢 郵稅四錢	逸事 <b>大臣の書生時代</b> (六版) 價三十錢 郵稅四錢	墨堤隱士著 <b>無錢修學</b> (再版) 價廿五錢 郵稅四錢	池田錦水君著 <b>無錢修學</b> (再版) 價廿五錢 郵稅四錢	矢野滄浪君著 <b>無錢修學</b> (再版) 價二十錢 郵稅四錢	墨堤隱士著 <b>食客</b> (再版) 價廿五錢 郵稅四錢	墨堤隱士著 <b>博士苦學談</b> (再版) 價廿五錢 郵稅四錢
---	---	--	---	---	--	--	---	---	--	---

菊池坂城君著 <b>帝國海軍談</b> 價二十錢 郵稅四錢	諸病治療 <b>呼吸術</b> 價十五錢 郵稅四錢	日本體育會體操教師高見澤宗藏君編 <b>簡易體力養成法</b> (再版) 價十五錢 郵稅四錢	ウインツ <b>簡易體力養成法</b> 價十五錢 郵稅四錢	東京遊藝會教師笠正澄君著 <b>最新ローションテニス術</b> (再版) 價十三錢 郵稅二錢	杉岡、森川兩氏共編 <b>手拭運動法</b> (五版) 價十錢 郵稅二錢	ルヲ氏 <b>水泳術自在</b> 價十二錢 郵稅二錢	久留米水泳會講師古賀國藏君著 <b>水泳術自在</b> 價十二錢 郵稅二錢	昇天齋一旭著 <b>西洋奇術自在</b> 價二十錢 郵稅四錢	彈劍居士著 <b>西洋奇術自在</b> 價二十錢 郵稅四錢	日露 <b>劍舞自在</b> 價十三錢 郵稅四錢	戰爭 <b>劍舞自在</b> 價十三錢 郵稅四錢	會呂利遊左衛門著 <b>劍舞自在</b> 價十三錢 郵稅四錢	新案 <b>謎と一口噺</b> 價十五錢 郵稅四錢	滑稽 <b>謎と一口噺</b> 價十五錢 郵稅四錢
--	------------------------------------	--	--	--	--	-------------------------------------	--	---	--	-----------------------------------	-----------------------------------	---	------------------------------------	------------------------------------





薩摩琵琶歌集

東京琵琶歌會編

074631-000-2

特63-124

薩摩琵琶歌集

東京琵琶歌會／編

M38

CEJ-0135

